九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『鷲使いの民族誌 ： モンゴル西部カザフ騎馬鷹狩文化の民族鳥類学』出版のごあいさつに代えて

相馬, 拓也
早稲田大学高等研究所 ： 助教

https://doi.org/10.15017/1928646

出版情報：鷹・鷹場・環境研究. 2, pp.81-83, 2018-03-20. Faculty of Arts and Science, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

<自著を語る>

『鷲使いの民族誌—モンゴル西部カザフ騎馬鷹狩文化の民族鳥類学』出版のごあいさつに代えて

Greeting of Publication, *Ethnography of Eagle Hunters - Ethno-Ornithological Studies in Altaic Kazakh Horse-riding Falconry in Western Mongolia –*

相馬　拓也
SOMA, Takuya

この度、新著『鷲使い(イーグルハンター)の民族誌—モンゴル西部カザフ騎馬鷹狩文化の民族鳥類学』が 2018 年 2 月 28 日、ナカニシヤ出版[1]より出版の運びとなりました。簡単ではありますが、研究の舞台裏等を述べまして、自著紹介と代えさせて頂きます。

当該研究は、アルタイ山脈に数世紀に渡って伝えられたモンゴル系カザフ人（以下、アルタイ系カザフ人）によりイヌワシを用いた騎馬鷹狩文化生態人類学、人文地理学研究の成果をまとめたものです。わたしは調査対象地モンゴル国西部バヤン・ウルギー県サグサイ村には 2006 年 9 月に初めて訪れ、この類稀な鷹狩技法を初めて目の当りにしました。本格的なフィールド調査を始めた 2011 年 7 月からは、イーグルハンター家族でののべ 400 日間に渡る住み込み滞在型フィールドワークによって、データ収集を実施しました。警戒心の強いカザフ人を相手にしての社会調査は、困難の連続でもありました。調査初期、村の中を日々歩き回る外国人への風当たりは強く、インタビューでは何度嫌な顔で疎んぜられても、幾度となく村人とイーグルハンター宅に足を運び、稀少な文化のドキュメンテーションに努めました。数年を経てみると、サグサイ村に戻るたびに「お前どこに行っていたんだ？」と村人から声をかけられるようになり、現地語を学習し、地域に溶け込まざるを得なかった 400 日間におのずと思いをはせるようにもなりました。こうした古典的な社会調査は、特定の社会集団やコミュニティの深部

サグサイ村でフィールドワーク中の筆者（2011 年 8 月）
写真は捕えられた約 3 月齢の仔オオカミと

サグサイ村でイヌワシの体尺測定中の筆者（2015 年 9 月）
注意していてもつかまれて大怪我することも

へと降りてゆく仕事であり、その人々の暗部にも触れなければなりません。それは「対象地域や人々を嫌いになってしまうかもしれない」という覚悟と同義と言えます。フィールドに根差した地理学者の仕事とは、ときに突き付けられたる酷な現実と対峙し、それでも地域の人々とより良い未来を築く意思を維持できるかどうかにあるといえます。アルタイでの日々は、その心構えを試されたような 6 年間であったと思います。かつて「未知」の土地へ赴き、これまで「知られていなかった文化」を自らの手で調べ上げる…、かつての民族学者や探検家の野心に近い感情と興奮を追体験させてくれた数少ない現場であったと思います。

もっとも思いで深い出来事のひとつに、研究遂行中に NHK ドキュメンタリー番組『地球イチバン 地球最古のイーグルハンター』(2015 年 1 月 29 日 22:00～22：50 総合 G 放送）の制作協力・監修にたずさわれたことは、大きな幸運であったと考えています。NHK のディレクター、カメラマン、ナビゲーターの女優のみなさんと 3 週間を共にして撮影に挑みました。帰国後も、NHK 本社の編集室にこもって、カザフ語の翻訳や文化考証などにたずさわれたことで映像記録に強い関心を持つようになりました。

本書の最大の目的は、特定分野への理論的・学術的貢献というよりも、現地カザフ鷲使いの馴致と出猟の技法、生活状況、伝統保護の現状、鷹狩成立の社会・生態上の要因などの個別具体性と個性に焦点を当て、当該地域の文化を広く敷衍する意図にもとづいています。そのため生態人類学・民俗学分野が得意とする、古典的な参与観察型の

冬季の出猟への同行調査中の筆者（2011 年 12 月）
－30℃を下回る狩場での獲物との神経戦

サグサイ村アグジャル山地での狩猟活動（2011 年 12 月）

ガール鷹匠アイチョルパン(右)とその父（左）（2014 年 9 月）

サグサイ村で一緒に暮らした愛犬たち（2011 年 12 月）
ドンガラク（母犬）、仔犬マイタバン（左）、サクラク（右）

フィールド調査にあえて重点を置き、「民族誌／エスノグラフィ」を記述することで、その独自文化の奥行をドキュメンテーションしました。また、地理学系フィールドサイエンスの強みでもある社会動態などの定量化手法も用いて、数理的な分析も試みました（たとえば、イヌワシの捕獲数／解放数、使用年数、給餌量、給餌動物の嗜好性など）。そのため、文化人類学や地理学という垣根を越えた学際研究であり、鳥類とその周辺の人間や自然をも包括した領域としての「民族鳥類学」を本テーマのプラットフォームとしています。

カザフの騎馬鷹狩とは、猛禽類の捕獲と狩猟への単なる使役を意味するものではありません。鷲使いはイヌワシの幼鳥を捕えれば、それから性成熟までの4～5年間を共に過ごし、その後捕えた山へと産地返還を行います。この産地返還の掟には、「イヌワシには山へ戻ってつがいとなって子を育て、再びよいワシとめぐり合わせてほしい…」という、イーグルハンターたちの願いが込められています。そのため、性成熟した4～5歳齢のイヌワシは「アナ（＝母親）」と称されます。「捕獲～馴致～出猟～産地返還」までのシーケンスをイヌワシと鷲使いの「出会いと別れの物語」と定義し、その馴致プロセスを単なる線形の主従関係ではなく、馴致個体の能力開発・繁殖能力強化・個体数維持に資する往還型のローカルな保全生態観であることを発見・論述した点に、本書の意義があると考えています。いわばイーグルハンターはイヌワシを含めた地域の環境共生観(Environmental Guardianship)の実践者であったといえるのです。

「騎馬鷹狩文化」の研究は、いまだスタート地点に立ったばかりと言えます。本書では、イヌワシをめぐるオーラルヒストリーや民間伝承、諺など、よりカザフ人にとってのイヌワシと鷹狩の質的・精神的連結の記述について、いまだ多くを割くことはできていません。また鷹狩研究を進める上での猛禽類や生物資源の保全生態への理論的・実証的貢献は、今後に残された大きな課題となっています。

ヒトと猛禽類の分厚い歴史の積層は、現代社会では忘却されたもっとも重要な「ヒトと動物の関係誌（Human-Animal Interaction)」と考えられます。鷹狩文化の研究はニッチな分野と思われがちですが、鷹匠は馴致・飼養・狩猟訓練を通じて猛禽類と交渉し、類まれな知と技法の伝統知／在来知(traditional ecological knowledge: T.E.K)を世界各地で築き上げたことに人類史上の大いなる意味と価値があるといえます。そして鷹匠はつねに猛禽の生態を把握し、人間の生活圏と鳥類の生存圏を行き来する「横断者」でもありました。ここに鷹狩の知と技法を科学的に検証し、その人類史上の意義と役割を再考する意味があると考えられます。

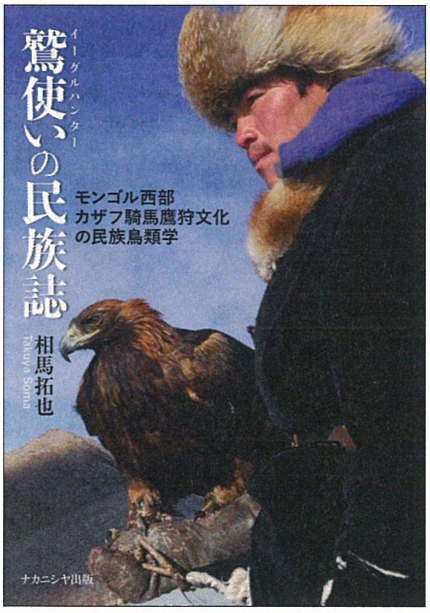
本書は100点以上の図版を含み、カザフのイーグルハンターや騎馬鷹狩文化の美しさを視覚的にも伝えたいという意図もあります。ぜひご高覧いただきまして、ご批判・ご鞭撻いただければ幸いです。

（文責：相馬拓也）

註

---

[1] 本書は放送大学教授・稲村哲也先生からナカニシヤ出版様のご担当者・酒井敏行様をご紹介いただくことで、実現の運びとなりました。この場をお借りして深く感謝の意を表します。



ナカニシヤ出版（2018年2月28日出版）
定価：5,500円